イザヤ書

□はじめに

アリエル・ミニストリーズからフルクテンバウム博士によるバイブル・コンメンタリー「イザヤ書」が出版されています。福岡バイブル・スタディでは、このコンメンタリーに基づき、イザヤ書を学びます。原書は次のとおり、11 部の構成です。

第一部　イントロダクション
第二部　罪の告発（イザヤ書 1 章）
第三部　エルサレムの祝福された未来、しかし哀れな現状と近い将来のさばき（イザヤ書 2 章～4 章）
第四部　イスラエル民族：主のぶどう畑（イザヤ書 5 章）
第五部　イザヤの召命（イザヤ書 6 章）
第六部　インマヌエルの書（イザヤ書 7 章～12 章）
第七部　諸国に対する宣告（イザヤ書 13 章～23 章）
第八部　イザヤの小さな黙示録（イザヤ書 24 章～27 章）
第九部　ヒゼキヤの治世第 14 年の危機に瀕しての宣告（イザヤ書 28 章～35 章）
第十部　ヒゼキヤの治世第 14 年の危機に関する出来事（イザヤ書 36 章～39 章）
第十一部　イスラエル民族の贖いと回復（イザヤ書 40 章～66 章）

この学びでは、原書を忠実に翻訳するものではなく、要点をまとめつつ、メシア預言を重点的に学んでいきます。
別名「イザヤの福音書」とも呼ばれるほどにメシアについての記述が多いイザヤ書を通して、主イエス・キリストについて、より深く知ることができるよう、祈りつつ学んでまいりましょう。
今回は、「第一部　イントロダクション」です。

第一部　イントロダクション

誰が書いたのか、いつ、何のために書かれたのか、そして、書かれている内容で特に注目すべきところは？・・・

1. イザヤという名前とその意味
   (1) 本書は、預言者イザヤが預言した内容を記した書物なので、イザヤ書と呼ぶ。
   (2) イザヤという名は、ヘブル語で「主は救い」という意味。イエシュア（イエス）、あるいはヨシュアといった名も同類で、「主は救い」を意味する。
   (3) 「主は救い」とは、どういう意味か。救いは主からのみ与えられるものであって、人の行いや荘厳な儀式によって得られるものではない、ということ。
   (4) 預言者イザヤは、その名の通り、主のほかに救い主はいないと預言した（イザヤ 43：11）。

2. 預言者イザヤの家族
   (1) 1：1　「アモツの子イザヤ」・・・父親はアモツ。アモツがどういう人物だったか、聖書に記載なし。ユダヤ教ラビたちの伝承によれば、アモツも預言者でユダの王アマツヤ（Ⅱ列 14：1）の兄弟。
   (2) 妻の名は記載なし。しかし、8：3　「女預言者」と呼ばれている。預言者の妻だからなのか、あるいは実際に預言ができたのか、不明。
   (3) 二人の息子　彼らの名前の意味と、ユダ王国のその後の歴史とは、深い関係
      ①　長男　7：3　「シェアル・ヤシュブ」＝残りの者が帰って来る
      ②　次男　8：3　「マヘル・シャラル・ハシュ・バズ」＝分捕り物はすばやく、獲物はさっと（持ち去られる）

3. 預言者イザヤの生涯における出来事
   (1) 預言者としての召命を受けたときの経緯は、6 章に。ユダの王ウジヤが死んだ年（740 B.C.）、イザヤはこのときから、およそ 50 年間、預言者として用いられた。
   (2) ウジヤ王に関する記録を書いた（Ⅱ歴 26：22）が、その記録は現存していない。
   (3) アハズ王と鋭く対立した（7 章）。その中では、メシアが処女から生まれるという預言をした。
   (4) 神は預言者に時折、なんとも変わったことをさせて、それを通してイスラエル

民族に対してメッセージを送ることがあった。イザヤの場合もそうであった。イザヤは裸になり、裸足で、3 年間、民の中を歩き回らされた（イザヤ 20 章）。

(5) ヒゼキヤ王の治世第 14 年、アッシリア王センナケリブが侵攻してきた（36～37 章）

(6) ヒゼキヤ王が重病になった（38 章）

(7) バビロンからの使節団がヒゼキヤ王のもとに来た。このときイザヤは、将来起きるバビロン捕囚について預言した（39 章）

(8) 預言者イザヤの死については、記録なし。伝承では、マナセ王によって、のこぎりで引き殺された。Ⅱ列 21：16「咎のない者の血まで多量に流した」、ヘブル 11：37「のこぎりで引かれ」は、このことであろう。【補足：マナセは晩年に悔い改めて信者となり、救いを受けた】

4. 預言者イザヤの時代

(1) 背景に、アッシリアという強国の存在

① イザヤが預言者としての活動を開始した頃は、アッシリアの全盛期

② 預言者としての活動を終える頃は、アッシリアの勢威に陰りが見えてきて、バビロニアが立ち上がろうとする時代

(2) アッシリアの王は 4 人登場する。特にイザヤと関係したのは四番目センナケリブ

① ティグラト・ピレセルⅢ世　（Ⅱ列 15：19 では「プル」）

② シャヌマネセルⅤ世・・・北王国イスラエルに侵攻するも、途中で死去

③ サルゴンⅡ世・・・・・・戦役を引き継ぎ、北王国を滅亡させる

④ センナケリブ

(3) 北王国イスラエルの王は 7 人登場する

① ヤロブアムⅡ世（Ⅱ列 14：23）

② ゼカリヤ（Ⅱ列 14：29）、6 カ月間、謀反で倒れる

③ シャルム（Ⅱ列 15：10）、1 か月間、謀反で倒れる

④ メナヘム（Ⅱ列 15：14）、アッシリア王プルに銀千タラント提供

⑤ ペカフヤ（Ⅱ列 15：22）、2 年間、謀反で倒れる

⑥ ペカ（Ⅱ列 15：25）、20 年間、アッシリア王ティグラト・ピレセルの侵攻を受け、謀反で倒れる（Ⅱ列 15：28～29）

⑦ ホセア（Ⅱ列 15：30、17：1）、9 年間　北王国滅亡

(4) イザヤは南王国ユダの預言者。ユダの王 4 代と関係する

1：1　**アモツの子イザヤの幻。これは彼がユダとエルサレムについて、ユダの王ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの時代に見たものである。**

① ウジヤ（792/791-740 B.C.）

- Ⅱ列 15：1～7 では「アザルヤ」　16 歳から 52 年間
- 5 節の「主が王を打たれた」理由は、Ⅱ歴 26：1～23

② ヨタム（共同統治者 750-740;単独統治者 740-735 B.C.）

③ アハズ（735-716/715 B.C.）

- 3 つの罪（Ⅱ列 16：3～4）
- 北王国がシリアと組んで圧迫してきた→メシア預言「処女から生まれる」を伴うダビデ王朝守護の約束
- 守られたにもかかわらず、アハズはアッシリアに占領されたシリアのダマスコを訪問して、アッシリア様式の祭壇を視察。これを模倣製作して、エルサレムの神殿に設置することを指示。さらにアッシリアとの同盟（実質は従属）政策に踏み切った。

④ ヒゼキヤ（715-687 B.C.）

5. 預言者イザヤと同時代の人

(1) 預言者ホセア（およそ　750-710 B.C.）　北の預言者

(2) 預言者ミカ（およそ　740-710 B.C.）　イザヤと同じ南の預言者

6. イザヤ書のテーマ

(1) メシア初臨に関する預言・・・預言書の中では、イザヤ書が最も多い。

(2) メシア再臨の預言、そしてメシアの王国に関する詳細な預言

(3) 「主の日」と呼ばれる大患難期に関する預言

(4) 神の主権を強調

(5) 神の聖さを強調。「イスラエルの聖なる方」といった表現が多く使われる

(6) イスラエルの残れる者（レムナント）について扱う。レムナントの教えは、預言者エリヤと関連して I 列 19：18 が始まり。イザヤは、その教えをより詳細に語る。

(7) イスラエル民族に対して繰り返し、悔い改めるように語る。

(8) イスラエルの神は、全人類の神でもある。

(9) エルサレムの現状やさばき、将来の祝福などについて詳細に語る。

(10) 南のユダも北のイスラエルも共に罪深く、神から離れている。

(11) 救いの真理を強調している。

(12) 形骸化している礼拝は神のみこころに適わないことを語る。

7.　イザヤ書の神学的価値

(1)　メシア預言の４つのパターンすべてを持っている。

①　初臨（7：14）

②　再臨（63：1～6）

③　初臨＋再臨（9：6～7、61：1～3）

④　初臨＋間隔＋再臨＋メシアの王国（52：13～53：12）

(2)　神についての理解を与える。

①　三位一体の概念を暗示（6：8、42：1、48：16、61：1、63：7～14）

②　神は聖いお方である

③　神は全能なるお方である

④　神はユダの神であるとともに、全ての民族の神である

(3)　メシアについての理解を与える。

①　メシアは、神であり、同時に人であるお方である

②　メシアは、いろいろなタイトル（称号）を持っておられて、それらはメシアの生涯における重要な局面と深く関係している

- インマヌエル（7：14、8：8）
- 不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君（9：6）
- イスラエル（49：3）
- 主の使い（37：36）、主の御腕（51：9、53：1）
- 主のしもべ（42：1～9、49：5～7、50：10、52：13、53：11）
- エッサイの根株から生え出た若枝（11：1）、エッサイの根（11：10）
- 民の契約（42：6、49：8）
- 国々の光（42：6、49：6、60：3）

③　メシアの生涯における出来事

- 処女から生まれる（7：14）
- 死（52：13～14、53：3～9、12）、葬り（53：9）、復活（53：10）

(4)　聖霊についての理解を与える

①　聖霊は単なる力ではない。知恵と悟り、思慮と力、主への恐れと知識、を持っておられる（11：2）

②　聖霊は悲しむことがある（63：10）

③　聖霊は全能の神である（40：13）

④　聖霊はイスラエルの民とともに荒野を歩かれた（63：7～14）

⑤　聖霊はメシアの受肉に関わる（11：1～2）

⑥　聖霊はメシアへの油注ぎとなる（42：1）、これはイエスの受洗と関係する
⑦　聖霊はメシアの宣教に関わる（61：1）
⑧　聖霊はメシアの特異な誕生に関わる（7：14）→ルカ 1：35
⑨　聖霊は霊感を与え聖書を記録させる（59：21）
⑩　創造は三位一体の神のみわざである。聖霊も創造に関わった（40：12～14）
⑪　聖霊はイスラエルのために戦ってくださる（59：19～21）

(5)　天使についての理解を与える・・・天使には大きく 3 つの階層がある。上から、ケルビム、セラフィム、一般の天使である。イザヤ書には、セラフィムについての記述がある（6：2～4、7）。
①　セラフィムは 6 つの翼を持つ。二つで顔をおおい、二つで両足をおおい、二つで飛ぶ
②　セラフィムは、神の御座の上の方に立っていて、飛びながら、互いに次のように呼び交わす。「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主。その栄光は全地に満ちる。」
③　セラフィムのうちの一人が、祭壇の上から火ばさみで燃えさかる炭を取ってきて、それをイザヤの口に触れさせて、イザヤの罪を清めた。

(6)　サタンについての理解を与える
①　単なる悪いエネルギーではない。知性、感情、意志などを持った人格的存在である。14：13～14 では、サタンは 5 回「私は～しよう」と言った。
②　サタンのタイトル（称号）のひとつは、14：12「明けの明星、暁の子」。これは、サタンが堕落する前、最初に造られたときに持っていた高貴な輝きを示すタイトル。

(7)　堕天使（悪霊）についての理解を与える
(8)　人の構造についての理解を与える（10：18「たましい、からだ」）
(9)　罪についての理解を与える（イスラエルの罪、異邦人の偶像崇拝の罪、そしてイスラエルによるメシア拒否）
(10) 救いについての理解を与える（身体的救いと霊的救い、義認、悔い改め）、律法のディスペンセーションにおける救いに至る信仰の内容は、43：10～13
(11) イスラエルについての理解を与える（8：14～17、10：20～23、28：5）
(12) 教会について暗示している・・・異邦人の救いに関する預言を含んでいる（42：1～6、49：5～13）。
(13) 終末についての理解を与える（個々人にとって【よみ】、世界にとって【主の日＝大患難期】）